



1970年カンヌ映画祭  
グランプリ受賞

ドナルド・サザーランド  
エリオット・グールド  
トム・スケリット  
サリー・ケラーマン  
ロバート・デュボール  
ジョー・アン・プフルーク  
ルネ・オーベルジョノア  
ロジャー・ボーウェン  
デイリー・バーゴフ  
デビッド・アーキン  
フレッド・ウィリアムソン  
マイケル・マーフィ  
キム・アトウッド  
ティム・ブラウン  
インダス・アーサー  
ジョン・シャック

製作インゴ・プレミンジャー  
監督ロバート・アルトマン  
脚色リング・ラドナーJr.  
原作リチャード・フッカーの小説  
M・A・S・H(移動野戦外科病院)より  
撮影ハロルド・スタイン  
音楽ジョニー・マンデル  
サントラ盤  
くもしもあの世にゆけたら>CBS・ソニーレコード  
く自殺のよろこび>MCAレコード



映画評論家 淀川長治氏  
スカッとした人は、これを見るがいい。笑いころげたい人も、これを見るがいい。しかし、見たあとゾッとしてガクンとはね返る……戦争への怒り!

映画評論家 南部圭之助氏  
喜劇はここに体系を一変した。一時間五九分、デングリ返るような騒ぎと爆笑のなかに、七〇年代の英知と感覚を全身に浴びることが出来る。喜劇王国アメリカが送った、チャップリン以来の革命である。

スゴイやったぞ!  
アメリカ映画が生んだ新らしき傑作!

# M\*A\*S\*H

近ロードショー  
パナビジョン デラックスカラー  
先の内東宝

# アツシユ



FOX映画

### ▶スタッフ◀

製作……………インゴ・ブレミンジャー  
 監督……………ロバート・アルトマン  
 脚色……………リング・ラドナーJr.  
 原案……………リチャード・フッカーの小説  
**M★A★S★H**(移動野戦外科病院)より  
 音楽……………ジョニー・マンデル  
 撮影監督……………ハロルド・スタイン

### ▶キャスト◀

ホークアイ……………ドナルド・サザーランド  
 トランプパー・ジョン……………エリオット・グールド  
 デュック……………トム・スケリット  
 ホーリハン少佐(熱い唇)……………サリー・ケラーマン  
 ブランク・バーンス少佐……………ロバート・デュボール  
 ティッシュ中尉……………ジョー・アン・ブアルーク  
 ヘンリー・ブレイク大佐……………ロジャー・ボウエン  
 レーダー・オリリー……………ケイリー・パーゴフ  
 ワルドウスキー大尉……………ジョン・ジャック

# マッシュ

パナビジョン■デラックスカラー

**M★A★S★H**  
 MOBILE ARMY  
 SURGICAL HOSPITAL  
 (移動野戦外科病院)

20th  
 CENTURY-FOX  
 FOX映画

## マッシュという映画

南部圭之助氏(映画評論家)は——

この若い外科将校集団は過去のすべての喜劇体系を解剖手術して、映画に新しい生命を与えた。鮮烈な頭脳回転とリミットの無いエネルギーによる波状攻撃は、知性と常識という軽薄なレーダーをアツというまに笑殺し、1時間59分を息つくひまもない豪快なスピードで快走する。生殖器も数分間二回にわたる笑撃をくらったが、肝臓笑はまだ通信途絶で不明だ。頭脳は台風直後の快晴ムードだが、爆笑の取捨解明にはあと数回の鑑賞を必要としよう。

ニューヨーク・タイムズ紙は——

「マッシュ」は、無神論と生血とユーモアをつきまぜた作品だ。作品の総体的な狙いは感情の自由と冷たい機知とショッキングな良識である。不孫、不敵なお笑いタップリの映画だ。

淀川長治氏(映画評論家)は——

“エム・エー・エス・エイチ”“マッシュ”いまにこの言葉が大流行するのではないかと思う。

第一次大戦のあとプロドゥウェイの舞台で“ホワット・ブライス・グローリー”という兵隊劇が大ヒットしたことがあった。それまでは兵隊劇といえば涙と愛国の英雄が主人公であったものが、この舞台劇は兵隊を豚小舎の中のキャベツのくさったモノみたいに描いてしまったのであった。そしてこれは映画でもサイレント時代に一回、そのあとトーキーで一回。前者はラウォル・ウォルシュ、あとのほうはジョン・フォードで映画化されたが、この舞台劇は、たちまちサノバガン(サン・オブ・ア・ガン)という汚い兵隊言葉を流行させた。この野郎!という兵隊と兵隊が互いをさげすみあい下等あつかいした言葉。実はもっと汚い意味もふくんでいるのであろう。

大正時代から昭和初めにかけて兵隊を軍神呼ばわりしていた私たちはこの映画化されたサイレント映画「栄光」を見てびっくりかえるくらいビックリし、そして痛快がった。

さて……こんどの“マッシュ”は……とんでもない……それどころではなかった。

マッシュとはモービル・アーミー・サージャカル・ホスピタル(移動野戦外科病院)の頭文字の四字を集めたものであるが、この映画を見れば誰もが何かと“オー……マッシュ”と使用したくなる。

朝鮮戦争たけなわのその前線のキャンプ外科病院。映画は初めから終りまで血だらけの負傷兵のその血、血、血。腹をえぐり、足を切り、目だまをくりぬく……それらはすべて死の迫る負傷兵への名医たちの死にもものぐるいの手当てなのであるが、ここにはナイチンゲールくそくらえ!とでも云いたい兵隊名医のげすばったさまが開いた口がふさがらぬ汚き野卑さ下等さ好色さで描かれて行く。

俺はホモなんだと叫ぶ者もあれば、女の兵隊のからだを見せるぜ……というわけでその女兵隊がテント小舎でシャワーを浴びるそのテントをばさりと切り落すヌード・ショーのハプニング。女

兵隊は怒り狂って全裸で地べたを這い回る。それを眺め、やんやの大喝采の兵隊野郎たち……かと思うと……女兵隊男兵隊……もちろん彼らはすべて前線の名医と呼ばれる軍医なのだ……この女この男が、ついに互いに一つのベッドを共にする、ところがそのベッドの下にマイクを仕かけ、この二人の愛のうめき囁きを、中けいで、兵舎すべての全キャンプに、しかも拡声器をもってボリューム上げて放送してしまう。

見ている腹の皮がよじれるくらい可笑しくてハレンチで、笑いが止まらぬ……さてその画面の奥の奥に……私たちは戦争の、この肉を裂き足をもぎとり心臓を掴み出す、このまぎれもない神の許し給わぬ残酷を人間が人間に犯すその愚かさその非情それらへの怒りがこみあげて「雨にぬれた舗道」のロバート・アルトマン監督は再びここに彼の作品経歴の中に大きなマークをこの注目作を打ち出したことになる。

ライフ誌は——

近年まれに見る最高傑作の喜劇。「マッシュ」は、ある人たちには卒直に受けとりにくい作品だろう。というのは、いかなる喜劇、いかなる種類の映画も、これほど、われわれに挑戦して来ないからだ。

高山秀子さん

(オランダテレビ局アシスタント)は——

スクリーンに湧きでる人血のしぶき。猥談を交わしながら手術を進める軍医達。戦争とはかくもばかばかしい人間のゲームなのか。この映画が非人間的な存在を続ける現代の我々にむけての強烈な挑戦を如何に受けとめるか。笑いの奥にひそむ無気味な静けさを観客は感じとらねばならない。MASHとは華らねばならぬ現代の用語ではないのか。

鈴木明夫君(学生)は——

大変おもしろい映画です。大声をだして笑いました。大変恐い映画です。驚きました。

佐藤忠男氏(映画評論家)は——

近来の傑作だと思います。ブラック・ユーモアの尖端を行く、というより、怒りのユーモア、とも云うべき新分野を開発した映画だと思います。

福岡 翼氏(女性セブン編集部)は——

お腹をかかえ、声をかぎりに笑いころげているうちに、その笑いが、途中でこおりついてしまった。人間の怒りと悲しみを、こんなにも明るくおおらかに描いた映画は、おそらくこれ一本限りだろうと思う。笑いころげて、映画が終わったあとから涙と恐怖がつきあげてくる。「M★A★S★H」とは——現代のバイブルである。1970年の今だからこそ、見ておくべき貴重な映画である。